

「自己肯定感」どう育てる？

「自己肯定感」←「自己調整力」



アクションプランの「徳」の項目に「自己肯定感の向上」を掲げている学校が多くあります。岡山県でも「自己肯定感の向上」が課題の一つになっています。どうすれば子ども達は、「自分には良いところがある」と感じてくれたり自信を持って行動してくれたりするのでしょうか？

周りの大人が、その存在を大切に思うこと、受容的な態度で接することが基本になりますが、「成功体験」も大切です。「がむしゃらにやったらできた。」「なぜか分からないが上手くいった。」という経験も必要かもしれませんが、学校教育では意図をもって、計画的・継続的に「自己肯定感」を育てていきたいですね。次の二つの考え方をもって取り組んでいくことが大切ではないでしょうか。

- ①成功体験・・・「めあてを立て、成功のための見通しを持ち計画を立てる、辛抱強く取り組み、成功の達成感を味わう、周りからの称賛をえる」このような流れから達成感を感じ自己肯定感につながっていく。
- ②失敗体験・・・なぜ失敗したのか分析し改善策を考える、次の活動に生かす。
- ①②とも自己肯定感につながります。失敗してはいけないと考えずに、成功も失敗もどちらも大事と捉えましょう。この二つはつまり「自己調整力」を育てることです。授業だけでなく全ての教育活動で「自己調整力」をどう育てていくかを考えることが「自己肯定感」につながる取組になります。

好事例紹介：「蒜山中学校」

教科の壁を越え、同僚性を高めながら組織づくり・人材育成を行っている取組を紹介します。



学校づくりの基になった考え

2年前に生徒間トラブルやいじめ事案が発生し、生徒の自己肯定感も低かった。生徒たちのつながりを何としても作らないと、と感じた。そこから「グループでの話し合い」を重視した授業をおこない、生徒たちが心を開いて、楽しく学ぶことを目指した。

Team3.4(チームさんよん)

- 4人を基本の人数としてグループを作り、話し合い活動を中心とした協働的な学びを行っている。
- Team3.4という呼称が子ども達に伝わりやすく、チーム意識も生まれている。教職員で「教え込む場面も必要」ということを共有し、単元計画の中に「Team3.4」を位置付けている。

蒜山中学校の取組からは「生徒同士をつなぐ」「生徒の実態から」「やってみて改善する」・・・こんなキーワードが見えてきます。

組織づくりをどのようにしたか

- ◎「生徒たちの良いところを認め、生徒たちが心を開いて楽しく学ぶことができる授業をしよう。」と教職員全員で確認した。
- ◎生徒の実態を共有し、そこから取組を創っていった。
- ◎試行錯誤、「やってみて、改善していく」姿勢を大切にしてきた。
- ◎同僚性の高い教師集団・・・「相談しやすい管理職」、「気軽に、楽しみながらやってみようとする職場の雰囲気」が失敗しても大丈夫、そこから学んでいこうとする教師集団につながっている。

校長先生の話

生徒間トラブル、いじめ事案などの発生について、生徒に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。なんとか、子ども達をつなぎたいと痛感した。

外部講師等の示唆は役に立っているが、そのまま実行するのではなく「生徒の実態」から取組を考える。「やってみて、改善していく」という姿勢を大切にしている。

